

ツ
キ
モ
ノ
-白-



Studio ***46

霧
夜



目次

☒：霧夜	
.....	2
オマケ	13
-INFOMATION-	15

☒：霧夜

何度も夢に出る黒い光景が、^{うつきかざり} 榎 風瀧にはあった。

キレイな死神が近付いてくる。黒い雪解け水の^{ふち}淵で、学生服を着た青年姿の死神。ぼやけた岸边に横たわる二人の悪魔に、死神は透明な声色で優しく告げた。

—おまえ達は本当に、これで良かったの？

悪魔の二人は、黒い水底で、消えてしまった人間の少女を探していた。死神もその少女を探すために来た。

二人の悪魔の魂を代償に、消えた少女は人間の世に戻れる。少女の兄がそれを願って、かつて彼を救った死神を人世に連れて来たのに、兄も死神も土壇場で、霧夜に惑って深淵に身を墮としてしまった。

冷たい水辺で体を起こして、彼だけでも引き上げた風瀧は、相手の変貌に呆然とした。
—どうして……ラクト……？

隣でもう一人の悪魔が起き上がった。黒い悪魔の翼が守る卵を、少女の兄は片手で抱える。風瀧の視界を奪う彼に、悪魔は哀しげな顔を浮かべてきた。

—……それが、オマエのこたえ？

蒼い光が彼を包む。腕の中の黒い卵は、やがて—

人間界とは、技術の発展は凄まじいののに、人間自身は脆弱そうだ。異世界からの極秘留学生である風瀧は、右肩で束ねた髪を指ですきつつ、高校の窓から校庭を見つめていた。「榎。何か心配事があれば、すぐに相談するんだぞ」

一カ月近く休んだ期間があったので、登校拒否だと噂されていた風瀧に、暑苦しい担任はいつも優しい。静かに頷くと満足そうに、教室を^{はなは}後にしていった。

面倒な個人面談が終わった。風瀧はただ、自分だけ^{はなは}甚だしく遅れている学力について対策を聴きたかったのに、小学校レベルの教養もまちまちである風瀧に、担任は「虐待されていたのか？」と勘違いしたらしい。異世界人だから、と言うわけにもいかず、担任の子供に使い終わった参考書を何とか譲ってもらえるまではこぎつけた。

日本語はとっくに、習得済みだ。風瀧はたいがいの知識なら初見で覚えられる。高校の授業は前提がわからないことだらけで、穴を埋めないと全く使い物にならない。言葉がわかれば、英語や国語ではそれなりの点を取れるのに、数学や物理化学は惜しいところで概念が解らず、歴史や美術は最早壊滅的だ。

生物の教科書はとても面白い。この世界の生き物が成り立っていく様。地球で言えば錬金術に近い生業の家に、本来の風瀉は跡取りとして生を受けた。故郷の生き物と地球の生き物は大きく違うことはないのに、おそらく細胞の構成一つで、魔法といった神秘的な力が原則的に地球にはない。

生まれつき体が弱かった風瀉は、家業ができないどころか、風瀉を守ろうとした母を悪魔にってしまった。そんな事態の心配も地球にはないらしい。人間になるのは「悪い人間」で、それ以上でもそれ以下でもない。

「……………」

だから人間界では誰も、まさか今ここにいる風瀉が異世界の亡霊で、人間の女の子の体に憑いて動かしているなんて思いもしない。不登校の間に人が変わったような少女に対して、特別何も詮索はされない。

一年間、人間界の高校で人間生活を学ぶこと。この体の主はそう言われて人間界にやって来ていた。風瀉はその義務を代わりに果たしている。消えてしまった少女の意識が、戻ってきた時困らないように。

そのためには高校での孤立など些細なことだ。元々死者だった風瀉に、人付き合いなど専門外に過ぎた。

留学のスポンサーが借りてくれているマンションに帰ると、珍しい相手がドアの前でひっそり待っていた。

「お帰り。あれから友達はできた？ カザリ」

椀烙鍍。本来風瀉の双子だった者の名を名乗る青年。

この体の主の兄である烙鍍は、黙りこくる風瀉に、困ったように優しく笑う。もう風瀉の塩対応に慣れているのだ。風瀉はただ、不審なことを先に尋ねる。

「ここ、オートロックなのに。どうして入れたの？」

「うん、今日は空から来てみた。面白いもの、風瀉に持ってきたんだ」

にこにこ、烙鍍は小さな紙の包装物を取り出して言う。無表情に怒り口調できいてもこの笑顔だ。妹の体を奪った風瀉が憎いはずの相手が、いつもこうして笑いかけることが風瀉には痛に障る。

現状、風瀉が妹の体を離れば、意識が戻らない妹は本当に死んでしまう。だから風瀉でいても許されているだけで、妹の意識を戻す方法がわかれば、烙鍍はそうするだろう。たまにこうやって尋ねてくるのは、風瀉にとっては監視されているようなものだ。

「……とりあえず、入って」

空から来た、などという烙鍍が、何を持ってきたのか見当もつかない。人目に触れるのは確実にまずく、仕方なく風瀉は一人部屋に烙鍍を招き入れた。

生活用の家具と衣類と寝具以外、テレビも何もない風瀉の部屋。インターネットはスポンサーにもらったスマホがあれば十分で、帰り道で買った食材をさっさと片付ける。カザリはしっかりしてるなあ、と烙鍍が呑気に感心している。

烙鍍は今も、妹を助ける方法を探しているはずだ。なのに人懐っこい烙鍍はずけずけと踏み込んでくる。

「カザリ、大丈夫？ 無理はしてない？」

無理しかしていない。睨む顔で見返す。烙鍍は察しがいいので、伝わるだろう。

「別にこっちの学校、一年通う約束なんて、どうでもいいのに。まあ、うちにいるのも居辛いだろうけどさ」

「持ってきたもの。渡すなら早く渡して、帰って」

烙鍍の態度はともかく、風漓は烙鍍と馴れ合う気はない。この体の主さえ目覚めてくれれば、風漓の出番は終わる。誰とも心を通わせる必要はないのだ。

冷めた目線の風漓に、烙鍍がまた苦く笑う。先程の紙包みを出すと、中身をふわっと取り出していた。

「.....リボン？」

それは、この体の主がツインテールを飾って着けていた物だ。以前には紫苑色という、人間にはない髪の色体だったので、黒髪に見せる魔法がかかった代物。

黒い水底の力を受けることで、普段は黒髪になった今の風漓には必要なかった。だから放っていたリボンに、烙鍍は何をしたのだろうか。

蜜柑色の二つの細長いリボン。X型に結ばれており、烙鍍が軽く気を込めた瞬間だった。

「——こんにちは！ 死神ちゃんでっす！」

リボンが喋った。風漓は目をぱちくりとする。

烙鍍の手にかかるリボンの中心から、宙に向かってうっすら黒い羽が生えた。「空から来た」は、どうやらこの羽を使った話と見えた。

「ご用がある時はいつでも呼んでね！ オレは今からカザリの使い魔って言われているの！」

しかもその黒い羽は、何と流暢に人語を話すことか。それも風漓が聞き知っている、数少ない誰かの声で。

「これ.....死神の、声.....？」

「当たり。カザリがオレを引き上げてくれたあの時、『俺』が死神と思って掴んでた、黒い卵の中身で」

ほぼ一文だけで、烙鍍は見事に説明していた。この体の主を助けるために、かつて烙鍍を救った死神に、烙鍍は協力を依頼したことがあった。その結果は風漓の黒い夢の通り、死神は行方不明で、烙鍍は謎の卵を抱えて戻り、別人になっていたという話なのだ。

「.....あなた、誰？」

リボンに生える、黒い羽に尋ねる。確かにあの時、卵を守っていた黒い翼がこれなのだろう。翼という程形態が成熟していないので、羽としか言いようがない。

「オレ？ さあ、誰だろ！ オレにもわかんないよ！」

元気に応える、死神の透明な声と同じ黒い羽。あの死神は様々な事情で声変わりをしておらず、聞き分けやすい声色の持ち主だった。口調も死神とほぼ同じで、違うのは無気力か元気、それだけだろう。

「とりあえず、悪魔の一種だろうってさ。水月の力がこいつに流れてるし、悪魔は物にも憑くことあるし」

「……よく解^{かえ}ったよね。あの、意味のわからない卵」

そこから更に、何故このリボンに憑いたのだろうか。わからないことだらけであるが、烙鍍曰く、これなら身につけた風滴を常に見守れると、丁度いいと思って渡しに来たらしかった。

そうしたわけで、烙鍍は喋るリボンを置いて帰った。いらない、と言ったのだが、当の黒い羽が、

「やだー！ オレはカザリというー！」

と言いつ張^{みづき}ってのことだった。どうして？ ときくと、水月がカザリを心配してるから、と返ってきた。

水月というのは、風滴と一緒に、この体の主を戻すために死神が呼びつけた悪魔だ。体の主の魂を水月が持ってしまうっており、死神はそれを還して少女を戻すつもりでいた。

「あなたは、水月と関係のある悪魔ってこと？」

「多分ね！ オレの魔力は水月の魔力、水月の魔力は死神の魔力だもん！ だから死神ちゃん！」

はあ。思わず風滴は、全身で溜め息をついた。

「どうしたの、カザリ？ 疲れた？ お風呂に入って寝る？ それともオレを着ける？ ご飯食べる？」

すぐさまこれだ。このテンションには、風滴は到底ついていけない。応えるのもしんどくなってしまった。

まだ何かと喚^{わめ}くりボンを置いて、洗面所へ向かった。すると、小さな黒い羽でぱたぱたとついてきたので、思わず扉をしめるとぶつかって落ちた音が聴こえた。

誰かに何か、悪気があったわけではない。それでもこの体の主は、魂を悪魔の水月に渡して、己の意識を消してしまった。それが全ての始まりだった。

水月は元々、死神が生かしていた昏睡の悪魔だった。奪った魂をこの体に戻せば、水月は昏睡に戻るだろう。風滴も同じで、ここにいる死者に戻るはずだ。二人共それでいい、と思ったから烙鍍と死神に協力したのに、今もこうして見知らぬ人間界で呼吸をしている。

「日本凄い！ 高校凄い！ 勉強全部暗号みたい！」

授業中まで、リボンが煩い。この声は一応、普通の人間には聞こえないらしく、好きに喋らせている。

ツインテールにリボンというスタイルに戻った体に、一人だけ「楡さん！」と駆け寄ってきた少年がいた。中身は風滴のままであるので、やり過ぎしたが。

「風滴、今日は何食べる？ 買い物楽しいね、オレを着けて歩いてくれてありがと！」

好きで着けているわけではない。何処かに括りつけても柔軟にリボンを解き、玄関の郵便受けの隙間から外に出してしまう。風滴を追って羽ばたくリボンなど、人間界で見せるわけにはいかなかった。

木枯らしが吹き付ける今の季節は、二学期も終わりのクリスマスシーズン。熱意のある担任のおかげで、孤高な風滴はグループ行動の際にも配慮してもらえた。過保護だな、と思ったのだが、集団行動を学ばせるのは学校の大事な役割らしい。群れて生きる人間らしい発想だが、一人でも課題を成し遂げられる能力の方が大事でないのか、と風滴は思う。

異世界人である風滴の知識はまだまだ追いつかないので、テストではとても偏った点数を取る。それでも担任は「椀が凄く頑張ってる」と涙している。以前の少女が体育以外ほぼ零点だったからだろうが、普通に成績優秀者を褒めればいい話だ。そう言うとりボンは、カザリ、褒められるのキライ？ と返してきた。

「褒められたのに、嬉しくなさそう。カザリ、いつも何か、怒ってるみたい？」

「.....別に。評価基準が妥当じゃないから。それだけ」

以前の少女と、風滴を比べることがそもそも不当だ。担任には知りようのないことなので、責めるわけにもいかない。それと同じで、今少女の体を動かす風滴に向けられる憐れみや侮蔑は、今後少女の評価となってしまう。それは少女自身がしたことではないのに。

リボンに生える黒い羽は、着けてくれてありがとう、と風滴に言う。それもただの勘違いだ。機会があれば、水月にリボンを突っ返してやろうと風滴は思っている。

烙鍍は仲介しただけ。このリボン自体が、人間界に慣れている死神の留学する異世界少女へのプレゼントだった。それなら水月に返すのが今の筋だ。それまでトラブルを避けたいだけの風滴に、リボンはひと気の少ない帰路でずっと明るく話しかけてくる。

「クリスマスって、高校では終業式だよな？ 午前中で終わるってきいた。街がキラキラだよ、きっと当日はもっとキレイだよ、遊びに行こうよ！」

「知らない。行く所なんて何処にもないよ」

「えー。ただ歩くだけでも、多分楽しいよ？」

黒い水から連れて出てきた卵。烙鍍の話が本当なら、黒い羽は生まれたばかりだろう。何を見ても楽しい、その気持ちはわかる。風滴もこの体にいるだけの時は、少女がお出かけをするたびに一緒に楽しかった。

けれど、思う。傍観者でなく当事者になってみれば、それは楽しいだけのことではなかった。

「一人で長く歩いてたら、変な人に声をかけられる。制服だと補導されることもあるよ。それでも？」

うぐ、と、世間知らずのリボンは黙る。この黒い羽が知る情報の情報源は、主に水月らしい。外に出ない異世界の悪魔が、日本についてよく知るわけもない。

「それに、この街.....そんなに、キレイ？」

地球の都会は凄い。よくこれだけ建物が立ち、多い人口を養えているものだと思う。労力を考えると気が遠くなるが、魔法もない世界で人間達は頑張っている。

こんな国ばかりではないらしい。そちらがむしろ、風滴の感覚では当たり前だ。

日本の気候は不安定で、物価も買う場所や産地、メーカー等によって変わり、文明の発展の代償とばかりに空気は悪い。こてこてに装飾をつけただけの繁華街が、キレイに見えるリボンが不思議になる。もっとも黒い羽が得られる視界は、身近な誰かの念を通してぼんやりわかるだけらしく、要するに風漓の見る街をキレイだと言っているのだ。

「もっと静かで、自然が多ければいいのに。この世界、私は今も好きになれない」

「そうなんだ？ カザリが好き嫌い教えてくれるの、初めてだね。オレ、嬉しい」

少しだけ風漓は黙り込んだ。声や口調の落ち着きも含めて、それは予想外の反応だった。

「.....そんなこと、あなたは知りたいの？」

「うん。だってオレ、カザリのためにここにいるのに」

口調や声は、死神そのものなので余計に戸惑う。

風漓は少女の体に共に在るだけの頃、少女に関わる優しい死神に憧れていた。少女が意識を消さなければ、風漓は本来、人間の少女を守るために中にいたのだ。

守られるべきはこの体であり、風漓ではない。何を寝ぼけたことを言うのか、風漓の苛立ちが続く。

「私のため、って、水月のためでしょ？」

ちょうど、帰り道にある公園のそばで立ち止まった。傍目には一人で怒り出す姿を通行人に見られたら困るので、枯れ木しかない公園に入った。

「頼んでもいないのに、恩を着せられる覚えはない。水月と話せるなら、あなたを引き取りにきてと言って」

木陰で人目をはばかりながら言う。いちいちこんな配慮をしなければいけず、風漓には面倒なだけの相手。

え！ とりボンは、素っ頓狂な声で驚いていた。

「恩、着せてないよ！？ オレは、カザリに会いたいから、ここに来たんだよ！」

カザリのために。は、そういうニュアンスのつもりらしい。何も考えない言葉をリボンが続ける。

「ラクトが、カザリが淋しそうで心配、って言うから。オレ、ずっと、カザリに会いたかったんだよ」

「どうして？ 私が淋しかったところで、あなた達に何の関係があるの」

今まで、胸に収めていれば良かった話を、いちいち言葉にしないといけなかった。烙鍍はまずこの話題を避けてきたが、こちらはそうではないようだった。

「必要なのは『風漓』じゃないでしょ。私はずっと、いてもいなくても同じ存在だった。今は、いない方が良かった私になった。私がいなければ、烙鍍の妹は、消えることはなかったのに」

「.....——」

事実でしかない現状の経緯。助けようとされているのは、風漓ではない。それをわざわざ、風漓の心配をするように見せる烙鍍は、偽善者だとすら思っている。

リボンの黒い羽もそうだ。風漓はこの「死神ちゃん」と、会ったこともない。その意味では体の主も同じで、少女が消えた後に顕れた黒い羽は、どちらに感情移入する理由もないのはそうだ。けれど殊更、風漓の味方のように振舞われても、その必然性が風漓にはない。無責任な態度にイライラしてしまう。

そこでまた、黒い羽は意外なことを口にしていた。

「そうだね。オレも、オレはカザリと水月のツキモノだって、レイに聴いただけなんだよね」

「……レイ？ ツキモノ……？」

何処かで聞いたことがあるが、ぱっと思い出せない名前だった。レイ。珍しいこともある、と記憶を辿る。

「レイはオレに、もっと前に会ったんだって。オレもカザリも、いない方がいいから隠れてた、ってきいた」

「……??」

しんと話している黒い羽も、自信はない内容なのだ。詳細は追及せずに、風漓は気になった方を尋ねた。

「あなたは……いない方が良かった、っていうの？」

確かにたった今、リボンの水月が引き取れ、と風漓自身が言い放った。そのせいでそう思わせたのなら、謝りたくなる。厚意を見せかけられるのが嫌なだけで、烙鍍やこのリボンの存在が迷惑と言いたいのではない。

「わかんない！ 憶えてない！」

死神の声が元気に戻った。風漓の心を感じたらしい。

「でも、カザリがいない方が良かった存在なら、オレもそうなんだと思う。オレ達、一緒だよ、カザリ」

胸をずっと、不意に衝かれた言葉だった。

烙鍍は、風漓は悪くない、と言った。それをずっと優しい嘘だと感じていた。けれどリボンの黒い羽は、風漓が「いない方が良かった」ことを認めている。

「それは……私だけの話、じゃないかな」

カザリも黒い羽も、いなかった方が良かった存在。レイが誰かを思い出せないが、あまりに根拠の薄弱な伝聞だ。風漓には明確な咎があるというのに、黒い羽は憶えてもいない原罪を背負わされるのだろうか。

「オレの声が、カザリは聴こえるんだよね。レイは、オレと話せるのは、白い魂の持ち主だけって言った。それはみんな、いなかった方が良かった存在だって」

そこまで聴いて、風漓の背中に冷や汗が流れた。

それは違う。この話をそのまま肯定してはいけない。

「烙鍍もあなたと話せるんでしょ？ じゃあ烙鍍まで、いなかった方が良かった存在っていうの？」

「うん、そうなるよねえ。ていうか、一番悪いのって、ラクトじゃない？ そもそも、カザリにこの世にいてほしいって、願ったのはラクトだって聞いたよ？」

それは、否定しなければいけないこと。でも咄嗟に、理屈が思いつけない。黒い羽は辛辣に続ける。

「妹を助けるはずだった奴を、死神を巻き込んでまで止めたのはラクトでしょ。今のラクト、本当のラクトなのか偽物の烙鍍なのか、みんな意味がわかんないよ。風瀉もそれでイライラするんだろなって、烙鍍自身が、自分でわかってたよ」

——どうして……ラクト……？

——……それが、オマエのこたえ？

烙鍍は、人間の少女を死神が戻そうとした前後で、別人になって戻ってきた。黒い水に取り込まれるまで、烙鍍は少女の兄だったのだ。それなのに、卵を連れて引き上げられたのは「ラクト」——風瀉の双子だった。

「白い魂って、そういうものなんだって。月属性とも言って、誰かの強い願いを映しちゃうの。烙鍍は今、ラクトがあつた体を動かしてるツキモノなのか、烙鍍のメッキだけなのか、レイもずっと悩んでるんだよ」

妹を助けようとし続けながら、風瀉にも優しい顔を見せる烙鍍。ラクトが風瀉を望んでいる、風瀉もそう思いたくはあった。けれどそれは、妹を探すあの青年にとって、幸せではないことのはずなのだ。

「……烙鍍は、悪くないよ」

風瀉にはそれしか言えなかった。理路としては黒い羽の言うことの方が、明らかに筋が通っている。

「私が悪いの。私がそもそも、この体に宿ったから」

「それも、ラクトの望みだったってきいたけど？」

明るく甘いことを言うのに、死神ちゃんはわりあい容赦がなかった。本当にそれは言う通りの話で、死者だった風瀉自身には、身の振り方への希望はなかった。望んだのは、発端だったのは、烙人という双子の願い。

いつの間にか、公園のベンチに一人座り込んでいた。落ちかけている赤い夕陽の中、黒い羽が笑って言った。

「みんな、オレ達がいたから起きたことだと思うよ。そこに嘘はつけないよね」

「……………」

「でもそれが『悪い』のかは、決めるのはオレ達じゃない？ オレにはカザリは、自分が悪いって思いたいように見えるの。どうしてなんだろうね？」

「私が……自分が悪いって、思いたい？」

その後はもう、オレもよくわかんないよ、と会話が終わってしまった。けれどこの夕べは、風瀉にとって忘れられない縁——黒い羽の天使との出会いになった。

意識を消した人間の少女は、早逝したラクトから、風瀉の魂をその身に託されていた。ラクトにとっても妹分のような少女だった。

ラクトは死者である風瀧の魂を、無理に留め続けることで命を削った。それならやはり、ラクトが早くに亡くなったことも、それで風瀧が人間の少女に宿ったことも、風瀧の責任だと考えていた。黒い羽との拙い夕べの話の後に。

「ねえカザリ。ほんとに呼び出し、出向いちゃうの？ 相手、ホナミちゃん達だよ、絶対因縁つけられるよ？」

冬休みがあつという間に終わり、三学期も辛うじてやり過ごして、一年の留学という約束が終わりそうな頃のことだった。人間の少女の友達だった二人から、放課後に屋上に来てほしいという手紙が風瀧の靴箱に入っていた。

「大丈夫だよ。何があつたって、悪いのは私だもの」

それ、大丈夫はない……。謎の日本語を使う黒い羽に、風瀧は思わずフッと笑った。いつも表情の無いことで有名な風瀧なのだが、黒い羽と話す時には、一瞬だけでも笑える時が出てきた。黒い羽の人徳(?)だろう。

三月が間近で、やっと温かな陽の影が出てきた季節。屋上では二人の女子高校生が肌寒そうに、扉から少し離れた位置で風瀧を待ち受けていた。

「……来てくれて、ありがとう。……楡さん」

剣呑な空気の手紙の主は、隣にいる眼鏡の娘があわ、と焦っている。この体の少女と、仲が良かった二人。風瀧を知っている身内から多少の事情は聴いており、今まで近付いて来なかった二人が、どうしてわざわざ風瀧を呼び出したのだろう。風瀧は無言で立ち止まった。

屋上に入るドアを背にして、無表情に佇む風瀧に、手紙の主は、何の感情ともとれないまっすぐな視線を向けた。怒りでも恨みでも、責め句でもない目色。

「……………」

風瀧に何も、申し開きはない。少女の中身が違うと、この二人は知っているはずなのだから。

手紙の主が、やがて目を逸らした。知り合いの身内曰く、多少靈感が強い乙女ではあるという。

「……楡さん。私達……ずっと、待ってる」

隣の娘と手を握った。眼鏡の娘が辛そうに俯く。

そして二人は、一言だけを残して屋上を去っていった。

「……………あなたもそうなのね」

とても深かった一瞬が、ドアの閉まる音で終わった。

風瀧は半ば呆然としたまま、あまり風のない虚空をぼかんと見つめていた。

「ホナミちゃん、さすがだなあ……。自分も譲らないけど、カザリの望みもわかったんだね」

「私の……望み？」

「え？ 助けることでしょ？ だからずっと、その体にいるんだよね？」

当たり前のように言う黒い羽に、はっとしていた。あまりに当然の前提過ぎて、風瀧自身も忘れていたこと。

「叶うかどうかは、巡り合せ次第だしわかんないよ。でも、望んでるよね。風漓もずっと、待ってるんでしょ」

「……—……」

私達、待ってる。そうやっていった、この体の友達。

それは風漓には、やはり自分はいらない、と言われたことと同義だろう。それなのにどうして、今、風漓は、わけのわからない嬉しさに包まれているのだろう。

「ハッキリ言ってくれれば、すっとするよね。カザリの周りって、無理するなって優しく言いはするけど、カザリがいてほしいと思えないこと、まっすぐ言えるヒトはいなかったでしょ」

とてもまた、辛辣なことを言われている。けれど、その通り、と風漓も思ってしまった。

ここにいてほしい、と望まれているのは、風漓ではない。それはそう在って不思議のない事実には過ぎないのに、誰もが腫れ物に触るように風漓を扱ってきた。

風漓自身が、自分でなく人間の少女にいてほしいというのに。風漓の存在を否定する扱いを、避けようとする者ほど風漓の望みを見ていなかった。風漓こそ、人間の少女が戻ることを、周りと一緒に望みたかった。

「味方がいないよね、カザリ。ラクトもいつ、裏切るかわかんないしさ」

「…………… うん」

それは二重の意味で、烙鍍のどっちつかずの態度は、風漓の不信を煽っていた。烙鍍はおそらく、どちらも望み切れないだけなのだが、風漓の望みはこの体を、人間の少女に返すことでとっくに固まっているのだ。

「あなたは……私の、味方？」

つい、尋ねてしまっていた。黒い羽は明るく、本来そうであるような鋭い声で、消えることのないこたえを返す。

「味方かはわからないけど。でも、カザリの望みを、叶える手伝いをするよ。約束するよ」

透明な声言い切ったその時だった。風漓の内から、まるで霧が黒くなったような気が噴き出してきた。

「!？」

「……あ。やっとおれも、つながったっぽい？」

目前で黒煙の気体が凝縮を始めた。やがて、黒い服と黒い羽に、月白の青白い髪げっぱくの姿をとっていった。

真っ黒なダッフルコートに、右で括るポニーテール。小さな白い光を宿す、蒼い目を持った黒い羽の誰か。

「改めて、こんにちは！ 死神ちゃんでっす！」

「……え……？」

「オレが誰かは、咲姫さきねーちゃんにきいて！ 風漓と心をつなげられたら、オレのほんとの姿が顕れるって、教えてくれたのは咲姫ねーちゃんだから！」

言ってるそばから、風漓が一応持ち歩くスマホに、発信者不明の伝話がかかってきた。普通の通話でないことは、歌うような着信音ですぐにわかった。

「もしもし？ カザリ？ 久しぶりだね！」

「もしもし……まさか……サクラ……？」

誰かは咲姫と口にしたが、その名を持つ相手が風漓と話すとなれば、それは悪魔の咲^{サクラ}香となっただ。

咲香は唯一、風漓の昔の姿を知る友達だった。ただ咲香という悪魔の宿った咲姫が、この体の主を大事に思う人々の筆頭のため、あえて連絡は取らなかった。

「良かった、カザリ！ 紫^{しおん}音に心を開いてくれて——力を分けてくれて、ありがと！」

「……シオン？」

「そのコの名前。月光の天使の紫音。でもそうなれるかは、カザリにかかっていたの。もうリボンじゃなくてカザリが依り代だから、力を合わせて望みを叶えてね」

「……サクラ……？」

あ、やばい、警^{かおる}にばれる！ と咲香は早々に伝話を切ってしまった。月光というと、確かに覚えのある力がこの体には流れている。黒い水底に光をも飲み込む雪解け水は、霧夜の源となって今も流れ続けていた。

「そっか……あなた、シオンって言うんだ」

えへへ、と目の前で、黒い天使がVサインを出した。おかげで風漓も、気負わずに尋ねることができた。

「味方かはわからなくても。友達に、なってくれる？」

トーゼン！ と、黒い羽の天使が心から嬉しそうに笑った。風漓もつられて、短い間だけでも笑った。

霧夜 了

オマケ

月光の天使の紫音。水月が持つ悪魔の力を、風滴に流れる黒い水が、霧夜に映し出すと言う異端の天使。

しかしてその実態は、黒いダッフルコートを脱げば中には黒くて長いYシャツ、ローレグのショーツにニーハイソックスだけの、最早小悪魔の露出度だった。

「その姿って、サクラの趣味なの？ 紫音……」

「違うよ。暑いからいくつか薄着のパターンを視せてくれて、烙鍍がその中からイイ、って言ったやつだよ」

「暑いとか寒いって、感じるんだ……天使……」

天使として動ける力の源が得られれば、霊体は既に形成済みだったとのことで、容姿の駄目押しは烙鍍。ふう、と自室の机でため息をついた風滴に、楽しそうに紫音がまどわりついてくる。

「この部屋では凄く自由に動けるようにしてくれて、ありがとう、カザリ！ つきましては、もう一個だけ、お願いきいてもらっちゃダメ？」

「別に一個でなくても、私にできることならいいよ」

風滴の周囲には出現が可能になった紫音は、様々なお願いを言い始めた。その最たるものとしては。

「ねえねえ、せっかく人間界にもうちよっといるって決めて、こうやって生活もうまくいってるからさあ。ラクトもこっちに呼んで、みんなで楽しく暮らそうよ」

「……え？」

紫音の願い。それは風滴にとって、風滴の望みを映したようなものばかりだった。風滴が口に出さないことを、紫音は遠慮なく言ってくるのだ。

一年だけいるはずの人間界に、残ることを決めた時と言い出したのは紫音だった。あまり帰りたくない、と思ったのは風滴だったと、後で気が付くことになる。

「カザリもオレも、望みは不動で目標は一つでしょ。それ以外の時は、楽しく生きてって別にいーじゃん。未練がなくすっぱり闇に戻れた方が、あとあと禍根もなくすすむ気しない？」

そんな風にいつも紫音は、巧いことを率直に言って風滴を油断させる。そこには嘘や気遣いよりも、紫音自身の望みが色濃く出ているので風滴も頷いてしまう。

烙鍍を人間界に呼ぶ。風滴が本当は思っている、絶対に言い出せなかった望みだ。断られたら、やはりあの笑顔は嘘だとわかり、頷かれたら、烙鍍に負担をかけることになる。あえて遠ざけていた相手なのだ。

黒い水底に取り込まれる前は、金髪に蒼い目だった青年。今の銀髪に蒼い目と変わった烙鍍が、どれだけ風漓の知るラクトであるのかは本当に怪しい。

本来のラクトは紫苑色の髪に蒼い目という、化け物らしい姿の双子だった。風漓のことを風漓と判る以上、ラクトの記憶や魂を持つのは確かなのだが、どこまで双子として慕って良いのだろうか。

「あんまし難しく考えない方がいいよー？ ラクト、カザリが嫌がるから、って自重してただけで、何度もこっちに行くかもって家族を説得しようとしてたよ」

「え……」

「だからカザリが、ちょっとばかし力を貸してくれるなら、オレが周りを説得してラクトも連れてくるよ。それ、カザリから離れてもしばらくは霊体でいられるようにしてもらわなきゃ、無理な話だからさー」

そういうことなら、それは魔道や霊法に詳しい風漓の得意分野だ。この部屋では紫音が自由に動けるのも、部屋全体に水月の魔力を借りて結界を張ったからだ。一時的に以前のような使い魔とするのは、水月の力を借りれば不可能ではないことだろう。

烙鍍を呼んでくる。その提案に風漓の心がざわめく。

風漓は、わかりにくい性格だとよく言われる。烙鍍は人より大分敏い方なので、難無く風漓のつれなさを受け入れているが、好感を持ってくれた人は少ない。

紫音が紹介してくれた、ツキモノという仕事の社長の零は、咲杏の従姉で風漓の複雑な事情も一応知っていた。風漓以上に人当たりの悪い社長で、風漓がまだ人間界で暮らしたいなら、やれる仕事を勝手にやれ、と短期バイトを回してくれるようになった。

「ちょうど夏休みだし、カザリは宿題とバイトに集中、オレは里帰りってことでどう？

しばらく一人にするけど、大丈夫だよ、カザリ」

「……うん。そもそも私、一人暮らしだったし」

ほわほわと、胸の奥が緩んでいくのがわかる。紫音の言う通りだった。風漓の心さえ決まっているなら、楽しくやろうが暗くやろうが、向かう先は同じなのだ。

——『悪い』かどうか、決めるのはオレ達じゃない？

烙鍍が味方なのかは、この先も多分わかりはしない。大切なことは、風漓が烙鍍にいてほしいかどうか。

新しい生活が始まっていく。いつか終わらせるまでの間、黒い天使の願いをきくことくらい、悪くはない。

-INFOMATION-

ご覧下さりありがとうございます。

ツキモノ -白- は完結済の作品ですが、本編の時間設定が 2025 日本であるため、今年
はツキモノ時代ということで前日譚を書いてみました。

本編ツキモノ-白- (<https://puboo.jp/book/134788>)

お試し版・ツキモノ-白- 序

(<https://puboo.jp/book/135313>)

あまねこはる
天音心陽様が、ツキモノイラスト集も作って下さっているので、是非ご覧下さい。

→ (<https://xfolio.jp/portfolio/aonosekai444/series/163742>)

今後のくしろ創作活動について、もし何かご意見がありましたら。→ (https://boxfresh.site/kazari_sou)

※ bot 質問が多いツールなので創作ご意見以外は bot とみなし回答しません

2025.3.3 Studio ***46 X@kazari_sou

ツキモノ 白霧夜

著 者 pierrette**

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
